

教職課程  
自己点検評価報告書

令和5年3月

東京農業大学地域環境科学部

目次

I	教職課程の現況及び特色 -----	1
II	基準領域ごとの事例点検評価 -----	3
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み --	3
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援 -----	6
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム -----	8
III	「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス -----	11
IV	現状基礎データ票 -----	12

## I 教職課程の現況及び特色

### 1 現況

(1) 大学名：東京農業大学 地域環境科学部

(2) 所在地：東京都世田谷区桜丘 1-1-1

(3) 学生数及び教員数（令和4年5月1日現在）

学生数：教職課程履修者数 172 名／学部全体 2,058 名

教員数：教職課程科目（教職・教科計）担当 66 名／学部全体 70 名

### 2 特色

本学部は、森林総合科学科、生産環境工学科、造園科学科及び地域創成科学科の4学科で構成されている。各学科では、自然と人間が共生できる循環型社会の実現を目指し、現代社会が直面する問題解決の取り組みに繋がる教育研究を行っている。専門的知識と技術を身につけ、専門知識を活かし、実社会で貢献できる人材を養成している。

本学部を構成する学科と認定されている免許教科は下表のとおりである。

学科	中学校教諭一種免許状	高等学校教諭一種免許状
森林総合科学科	理科・技術	理科・農業
生産環境工学科	理科・技術	理科・農業
造園科学科	理科	理科・農業
地域創成科学科	—	農業

上記の免許状取得のため教職課程では、教育意欲に溢れ、理科、農業及び技術に関する専門知識を持ち、学校現場に対応できる実践的指導力を身につけた教員の養成を、全学的な協力・指導体制のもと各学科で行っている。

#### 各学科の教職課程の理念等

##### ○森林総合科学科

本学科では、「森林」という用語を林業・林産業や農村・山村等をも含むものとして捉え、自然科学と社会科学の両観点から、総合的な教育・研究を実施してきた。「森林から学び、森林に学び、森林を学ぶ」をモットーに、教育の全課程を組み立てている。まず、森林の機能について学ぶことにより森林そのものを理解し、次いで森林の利用に関する理論や技術の理解や習得を通して森林と人間との関係について、価値観や考え方などを総合的かつ実践的に指導してきた。こうした学科教育を支えることを目的に、4分野8研究室を配置している。

本学科では、上記の諸成果の応用あるいは社会還元のための具体的な取り組みとして、長年にわたり教員養成に努めてきた。森林に関する専門性を具備した人材が、その学習経験や研究成果を社会に還元する方途の有力な一つとして教員教育を通じた次世代の育成を位置付けている。教員に求められる自ら問題を発見し、その解決方法を考え実行し、そして学習者に寄り添いながら伝えることができるという資質を備えた教員の養成を遂行している。

### ○生産環境工学科

本学科は、「食料」、「環境」、「資源」、「エネルギー」などの諸問題に対して、「土」の文化と「農」の多面的意義を原点として、地域から地球へと考えることに重点を置きながら、人類の生存と発展を支えるための人材養成を基本的な学習・教育目標としている。本学の教育理念である「実学主義」に基づいたカリキュラムにより、多くの実験演習科目を通して、理論と実現象の対比から理科・農業・技術教育に対する理解を深めさせ、自ら創意・工夫のできる教員として、中学校教育における理科及び技術の授業、高校教育の理科及び農業の授業、生徒指導にあたることができる教員を養成することを理念としている。さらに教育現場で発生している教員と生徒及び生徒同士の人間関係に起因する様々な問題への対処、理科、技術及び農業に対する興味の上昇に資する教員養成を目指している。

### ○造園科学科

本学の教育理念である「実学主義」の精神を授業に取り入れ、農業科教育と理科教育に連動する授業を実習や演習を通して体験し、技術と学術の領域を含んだ授業によって生徒指導ができる農業及び理科教員を養成できるよう努めている。特に本学科の教育研究の目的は、日本庭園などにみられる私達の生活や文化を踏まえ、「人間と自然の調和」と「共生の社会」の実現を目指している。具体的な空間対象としては都市から田園あるいは自然地域といった環境が対象であり、それらの地域における景観を保全・活用してより良い環境を創造するため、専門家としての調査・計画・設計・施工・管理・運営及び材料に関する理論と応用を教育の中で養成し、豊かな感性やデザイン能力、そして確実な倫理観を持つ造園家や造園技術者の養成に努めている特徴があり、具体的なカリキュラムでは農業科教育、理科教育の内容を取り入れた造園教育を行っている。

### ○地域創成科学科

本学科では、水資源、食料生産及び環境保全等を担ってきた農山村地域の保全・再生、持続的発展に向けて行動できる地域社会の担い手となる人材を育成することを使命としている。その使命を果たすため、低学年次に配当される教養的科目や基礎的専門科目により、自然科学、人文科学及び社会科学に関する知識を、高学年次に配当される基幹的専門科目により、林学、造園学及び農業工学を基底とした地域創成科学の専門知識を習得するとともに、地域交流実習及びフィールド実習等の総合化科目の履修を通じて、習得した知識や技術を実際の課題解決に活用できるようにする。また、その過程において、「論理的・多面的に物事を考える能力」、「知識や技術を応用できる能力」、「他者と協力し問題を解決に導く能力」など、人材育成目標の達成に必要な素養を身につけさせる。上述の学科の性格・目的から「高度な専門的知識と技術を持ち、広い視野を備え他者と協力して積極的に行動できる教員養成」を理念とする。この理念を実現するための教員養成の構想として、4年次における到達目標を明示し、履修カルテにより到達目標の達成度を確認する。以上の理念及び構想から「林学・農業工学・造園学に関連する高度な専門知識を有するとともに、自然環境、生活環境及び社会環境の関わりについて広い知識と豊かな感性、観察力、高い倫理観、論理的思考能力を有する教員」を本学科の目指す教員像とする。

## II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

### ■基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

[現状説明]

#### (1) 基準項目1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

初代学長横井時敬による本学の建学の精神「人物を畑に還す」との言葉どおり、本学は開学以来全国から若者を集め、地域に貢献する人物となるよう教育してきた。教員養成においても同様で、課程履修学生が卒業後に全国各地で教育者として活躍することを目標とし、この東京農大精神と教育理念「実学主義」のもと、豊かで実践的な知識と技能を身につけた心身ともに健全な教員の養成を目指している。今日、生命科学は進歩が速く、農学や環境科学には社会からの期待が大きい。教職課程ではこのような動向を踏まえ、学部段階では学科の基礎と教員としての基本的かつ実践的な知識と技術を習得させる教育を行う。

以上のような教職課程教育の目的・目標を学科及び取得できる免許教科ごとに大学のホームページにて情報公開するとともに、学生には「学生生活ハンドブック」やガイダンスで周知している。また、関係教職員には学科会議等において共有を図っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-1-1 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」  
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)
- 1-1-2 学生生活ハンドブック2022  
(<https://www.nodai.ac.jp/campus/e-books/HB/>)
- 1-1-3 2022年度教職課程ガイダンス資料

#### (2) 基準項目1-2 教職課程に関する組織的工夫

本学では、全学的に教職課程を運営する組織として、教職・学術情報課程主任（以下課程主任）、教職課程所属の教員（以下課程教員）、6学部23学科のうち各学科から選出された教員各1名、事務局長、教務支援部長、幹事3名（3キャンパスの教職・学術情報課程業務担当課長各1名）から構成される教職・学術情報課程委員会を設置している。委員会は年2回行い、課程履修学生に対する教育及びカリキュラム編成に関する事項について、各学科と課程との連携調整を図ることを目的としている。また、必要に応じて教職課程委員会（部門連絡会）を開催し、特定学科に関連する連絡調整を行っている。本学部からも各学科1名が委員に選出され、教職課程の運営を担っている。

教職課程では、教育研究に関する事項を審議することを目的として、課程主任、課程所属の教授、教務支援部長で構成される教職課程教授会を必要に応じて開催している。その他に世田谷キャンパスでは課程主任、課程教員で構成される課程教員会を毎月開催し、課程の運営について審議、調整を行っている。

世田谷キャンパスの教職課程の運営は、課程主任のもと、課程教員が担当学科の課程履修学生の担任となり、教務課と役割分担で連携を密に行い、協働体制で行っている。ま

た、課程履修学生の指導は、教職に関する科目及び教育実習視察は課程教員が原則行い、教科に関する科目は学科教員が行う。また、学科教員による研究室でのキャリア支援など全学的な対応を行う中で、教職課程と学部間の協働による教育体制が図られている。なお、教職課程の取り組みなどに関する情報公開は、毎年度発行する「東京農業大学教職課程 Annual Report」や本学 HP で行っている。

#### ○森林総合科学科

本学科では、毎年新入生を対象としたガイダンスを実施し、本学科で取得できる教員免許状や履修方法について説明を行い、教職課程に対する理解を深めることができる取り組みを行っている。また、問題等が発生した場合は、学科教員会にて情報を共有し、教職課程と連携を図っている。

#### ○生産環境工学科

本学科では、新入生に向けたガイダンスにおいて、教職課程の案内を行っている。また、学科内に教員点検委員会を設置し、教職科目（教科に関する科目）に指定されている学科開講科目の授業視察と授業評価アンケートの取りまとめを行い、授業改善及び教員の質的向上を図る仕組みを構築している。授業視察は、学科教員が2年に1回の割合で実施しており、視察する学科教員は授業視察報告書を作成し、授業担当者が確認することになっている。その後、教育点検委員会で授業視察報告書を取りまとめ、学科教員会にて情報共有がなされる。また、大学で実施している学生による授業評価アンケートを活用し、担当教員が学生からのアンケート結果に対して自己分析を行うとともに、授業改善に向けた取り組みについて、教育点検委員会に報告するものとしている。授業視察報告書及び授業担当者の自己分析及び授業改善等を記した授業評価アンケートの結果は、全ての学科教員が閲覧できるようファイリングを行っている。

#### ○造園科学科

本学科では、毎年新入生を対象としたガイダンスで、教職課程の案内を行っている。また、学科内に教育点検委員会を組織し、毎学期学生の学習到達度について点検を行うとともに、週に一度開催される学科教員会で学生の修学状況について情報を共有している。

#### ○地域創成科学科

本学科では、新入生を対象としたガイダンスにおいて、教職課程について説明を行っている。学生の学修状況や授業内容については、学科教員会において情報共有を図り、必要に応じて学生指導を行うとともに、教員間で授業改善に向けた話し合いを行っている。3年次に研究室への配属以降は、研究室の学科教員の下で専攻実験及び卒業論文研究と並行して教育実習など教員免許取得に無理なく取り組むことができるよう教職課程と連携して学生指導を行っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-1 東京農業大学教職・学術情報課程委員会細則
- 1-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和4年度版  
(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)
- 1-2-3 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」  
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)

[長所・特色]

教職課程 FD・SD、東京農業大学教職課程 Annual Report 発行、部門連絡会、課程教員と教務課による情報交換・検討など課程履修学生に対する指導や個別対応を連携して行う全学的対応・体制・環境を整えている。

[取り組み上の課題]

教職課程の運営に関して、教職課程と学科教員との連携が課題である。社会性や同特性、教科や学科の専門性といった教員の資質の向上に向け、課程教員と学科教員と協働体制で課程履修学生に対する教育体制をさらに強化する必要がある。また、学生からの意見や要望を学部から教職課程にフィードバックする仕組みや教育実習を実施している学校への訪問の仕方・予算などについて検討する必要がある。

## ■基準領域2 学生の確保・指導・キャリア支援

[現状説明]

### (1) 基準項目2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成

基準項目1-1で示した各学科が目指す教員像に向け、1年次のガイダンスを通じて教職課程を学ぶにふさわしい学生像を周知している。教職課程では2年次に「履修カルテ」を配付し、課程履修学生は教育実習指導を通じて課程教員の面接を受け、履修カルテを作成することで課題確認を行っている。また、3年次には「理想の教師像」、「学校研究」など教員に求められる資質・意欲・関心を確認するレポート提出の機会を設けている。なお、本学では3年生修了時点までに、教職概論、教育原理、教育課程論、教育心理学、生徒進路指導論の単位を修得することを教育実習派遣要件に定め、教職課程の基礎を修得した課程履修学生を教育実習に派遣することとしている。

本学部では、それぞれの学科において認定されている免許教科は異なるが、理科免許状、農業免許状、技術免許状の該当するコースを設け、学士プログラムの中に各免許の授業科目を配置していることを「教職課程履修案内」に掲載し、学科ごとの履修モデルを体系的に理解することによりそれぞれの教員養成を行う。

<根拠となる資料・データ等>

2-1-1 履修カルテ

2-1-2 教職課程履修案内2022

### (2) 基準項目2-2 教職へのキャリア支援

本学部では各学科が担任制を導入し、学科担任が学生のキャリア支援を行っている。3年次以降は全学生が研究室に所属するため、研究室において学生のニーズや適性を把握してキャリア支援を組織的に行っている。各学科の課程履修学生へのキャリア支援については、次のとおりである。

#### ○森林総合科学科

本学科のキャリア支援は、1、2年生は学年担任、3、4年生は所属研究室の教員により学生の指導を行っている。また、教職課程とも連携し、履修状況の確認や相談等にも対応するなど教員免許の取得に取り組んでいる。さらに現職のOB教員と連携を図っており、得た情報は、随時本学科と教職課程で共有し、課程履修学生にも情報提供を行っている。

#### ○生産環境工学科

本学科のキャリア支援は、学年担任制に加え、各学生に対して個別に担当教員を配置し、1年次から2年次前学期までの期間はその担当教員が個別面談等を通してキャリア支援を行っている。なお、2年次後学期は分野教員、3年次以降は所属研究室の教員が個別面談等を担当する。面談結果は個別面談記録シートに記録され、学生のニーズや適性を教員間で情報共有し、継続的にキャリア支援を行う仕組みを構築している。

### ○造園科学科

本学科のキャリア支援は、学年担任制のほか、3年次の専攻研究、4年次の卒業論文で学科教員が所属する研究室で実施している。研究室では、所属している複数の教員によって複数指導が行われている。また、3年次よりキャリア支援や教職支援等も随時行っており、必要に応じて学科教員会で情報共有を行っている。

### ○地域創成科学科

本学科のキャリア支援は、学生に対して、1年次ではガイダンス、2年次では就職支援プログラムを実施し、キャリアに対する動機付けを行っている。また、3年次では卒業生の就職先企業などを中心とした学科独自のインターンシップを実施するなど学科教育のシステムの中にキャリア支援を明確に位置付けて学生指導を行っている。

また、早い段階から教育現場を体験するためにも、東京都、埼玉県などの教育委員会による教育ボランティア説明会を実施し、課程履修学生の積極的なボランティア活動への参加を推進している。さらに個別面談等を通じて自己評価・学習達成度及課題の確認と補完をしながら、次年度の教職課程履修に向けた心構え及び教員としての資質を考えさせる機会を設け、キャリア発達の促進を促している。

教職課程では、3年次の夏から4年次の夏まで30回の教員採用試験対策講座を実施し、教員養成の充実を図っている。また、外部講師によるキャリア講演、中学校の授業見学、教員採用試験に合格した課程履修学生を対象とした現地演習を教育委員会と連携して企画するなど、教育実習では学べない授業以外の経験を積ませている。

### <根拠となる資料・データ等>

2-2-1 2022年度学部・学科・課程紹介

2-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和4年度

(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)

### [長所・特色]

各学科では、個別面談を通じて学生1人1人のキャリア発達を支援し、本人の特性に応じたキャリアを学科教員とともに考え、支える場を設けている。

### [取り組み上の課題]

質保証・向上を目的とした課程履修学生の評価基準の設定が課題である。課程履修学生が受講にあたり、最低限の知識と技能を有しているかの確認、教員としての質を担保する履修条件に係る評価基準を定めることである。現在、各学年に対して評価基準を設定することを検討している。また、各学科では、個人面談等を通してキャリア支援を継続的に実施しているが、学科教員1人あたりが担当する学生数が多いこともあり、学生本位のキャリア支援を行うには、支援方法の再考が課題である。

### ■基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

[現状説明]

#### (1) 基準項目3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

研究室における実験を中心とした諸活動と学会発表等に伴う体験的・実践的な活動及び卒論研究を通じた問題の発見とその解決方法を見出す訓練を行っている。学生の研究においては ICT 機器を活用して情報活用能力を育成している。各学科の現状は次のとおりである。

##### ○森林総合科学科

本学科では、教科に関する科目を通じて森林に関する基礎的または応用的な知識や技術を習得するとともに、総合化科目や卒業論文の研究等を通じて、問題を自ら発見する能力を身につけること、問題を解決する方法を考え、実行できることを目指している。総合化科目では、グループワーク等を取り入れて実習課題に取り組んでいる。卒業論文では、8研究室のいずれかに必ず所属して一人1テーマを担当し、1つの論文を完成することを目標に、試行錯誤しながら取り組んでいる。実習や研究活動の過程において、研究室学科教員や学生同士でのディスカッション及び情報交換を通じて幅広い知見や高い専門性を修得している。また、修得した知見及び実習や研究の成果等は、レポートの作成、卒業論文発表会や学会発表を通じて発信することの重要性も同時に学び、伝えるための表現方法等も修得している。

##### ○生産環境工学科

本学科には、日本技術者教育認定機構（JABEE）により認定された教育プログラムがあり、質的水準を満たすとともに社会や学生の要望に配慮し、継続的に教育改善を行う教育システムが構築されている。このプログラムには多くの教科に関する科目が含まれており、教員を目指す学生が高度な専門性を身に付け、自ら創意・工夫して困難な問題に取り組む姿勢が養われている。また、1年次前学期から4年次後学期までに、フレッシュマンセミナー、共通演習、測量実習、基礎実験、専攻実験、専攻演習といった実験・実習科目を学期ごとに1科目配置し、学年進行に伴い専門的な知識及び技能を習得できるように配慮するとともに、グループワークやその成果報告会を行い、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上にも努めている。卒業論文では、卒業論文発表会での口頭発表を義務化し、研究室の学科教員以外の学科教員から個別に指導や評価を受けている。なお、優秀な卒業論文については、学科全体で開催される優秀卒業論文発表会にて発表を行い、各自のさらなる能力開発を促している。

##### ○造園科学科

本学科のカリキュラムは、学科専門科目として開講されている多くの科目が、教科に関する科目として開講しており、教員を目指す学生には高度な専門的知識や技能を習得することを可能とし、さらに実習及び演習を通して自ら創意・工夫して困難な問題に取り組む姿勢が養われるカリキュラムとなっている。特に演習には、グループワークや発表を通

じて、コミュニケーションやプレゼンテーションのスキルを向上させる内容を網羅している。また、卒業論文では、各研究室等において卒業論文に関する発表会を開催し、複数教員による指導が行なわれている。さらに優秀な卒業論文については、学科全体での優秀卒業論文発表会を開催し、各自の能力を高める指導が行なわれている。

#### ○地域創成科学科

本学科は、1年次前学期開講の地域交流実習で、農山村での農業体験や地域住民へのヒアリング実習を行うとともに、学生自身の出身地についての自然環境・社会環境情報を収集し、地域が抱える課題に対してグループディスカッションを行っている。1、2年次開講のフィールド実習では、現地での調査と情報収集のスキルを学ぶための実習を行っている。2年次開講の地域創成総合実習では、地域計画の立案を目標として現地調査（データ整理、課題抽出、計画立案）を行った後に、グループ単位での計画案のとりまとめとプレゼンテーションを行い、スキルだけでなくコミュニケーション能力と組織的な運営能力の向上を図っている。3年次以降は所属研究室における専攻実験と卒業論文を通じて、高度な専門知識・スキルの修得に加え、論理的思考力、コミュニケーション能力及びプレゼンテーション能力の向上を図っている。

教職課程では、教職課程の質的水準に寄与するコアカリキュラムを、履修カルテの内容を踏まえて系統的・体系的なカリキュラムとなるよう編成している。授業は、シラバスに基づいて到達目標の達成ができるように授業を設計し、学科内の教務委員会でシラバスの内容をチェックする。課程履修学生には、コアカリキュラム及び教員等育成指標の内容を踏まえて、1年生の段階から教員としての資質を見極める機会や体験を提供し、学び続ける教員像の確立、実践的指導力の育成を意識して様々な取り組みを実施している。

#### <根拠となる資料・データ等>

- 3-1-1 2022年度学部・学科・課程紹介
- 3-1-2 履修カルテ
- 3-1-3 教職課程履修案内2022

#### (2) 基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携

各学科では、実践的指導力の養成として、学科専門科目知識から基礎的な知識を学習し、実験演習、卒業論文を通じて教科に関する専門的な知識やスキルを習得させている。また、教職課程において学習指導案作成の指導、大学行事として学内避難訓練を通じた防災教育、救命講習を実施している。さらに地域行事や災害時における地域へのサポート、小中学校での教育ボランティアなど地域の教育委員会と連携協力体制が構築されている。その他に近隣の高等学校と高大連携事業を行っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 3-2-1 2022年度学部・学科・課程紹介
- 3-2-2 免許状更新講習テキスト
- 3-3-3 教育ボランティア説明会資料

[長所・特色]

各学科では、学科毎の専門の知識や技術を、実験演習科目を通じて習得し、3年次からは研究室活動を通じてより高度な専門性を身につけている。また、教育ボランティア活動を通じて、教育現場における実践力の養成にも力を入れている。

[取り組み上の課題]

ICT教育の実践的指導力と活用の強化が課題である。学校教育現場でICT教育の充実化が目指されていることを鑑み、ICTのスキルを身につけるにとどまらず、ICTを活用した効果的な授業の在り方、学校不応適や特別支援教育が必要な生徒へのICTの活用、校務、セキュリティへの活用などを含めた情報の力の向上を目指すこととその支援体制と環境の強化のため、一層、教育の充実を図る必要がある。学科の課題として、専門領域におけるデジタル技術やICT技術等の活用及びスキルの向上を目的とした貸出用のPCの充実と学生コンピューターの配置など環境の整備を積極的に進めているが、学科独自の対応では十分な支援が行えない場合もあるため、学部や大学での整備が必要である。

### Ⅲ 「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス

本学教職課程の全学的組織である教職・学術情報課程委員会において、自己点検評価の実施及び報告書作成までの手順・スケジュールを検討し、以下の作成プロセスを策定した。なお、本プロセスは、大学設置基準に基づく全学自己点検評価委員会とも情報共有し、常に点検及び見直しを行う。

第1プロセス（令和4年5月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検評価の実施内容等の決定



第2プロセス（令和4年6月）

教職課程、担当事務所管（教務課・学生教務課）による法令由来事項の点検等の実施



第3プロセス（令和4年6月）

学部教職課程委員会と学科による自己点検・評価の手順等の確認



第4プロセス（令和4年7月～11月）

自己点検評価の実施



第5プロセス（令和4年12月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検・評価報告書の承認



第6プロセス（令和5年2月）

自己点検評価報告書の公表



第7プロセス（令和5年3月）

自己点検評価報告書によるアクション・プランへの反映

## IV 現状基礎データ票

令和4年5月1日現在

設置者：学校法人東京農業大学					
大学・学部名称：東京農業大学・地域環境科学部					
学科の名称：森林総合学科、生産環境工学科、造園科学科、地域創成科学科					
1 卒業者数、教員免許取得者数、教員採用者数等					
① 昨年度卒業者数					484 人
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					387 人
③ ①のうち、教員免許取得者の実数 (複数免許取得者も1と数える)					29 人
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)					7 人
④のうち、正規採用者数					7 人
④のうち、臨時的任用者数					0 人
2 教員組織					
職階	教授	准教授	講師	助教	その他 ( )
教員数	43 人	17 人	0 人	10 人	